

## ■ウインド Etc. (風のエトセトラ)

# ジョシュア・ツリーの風景から (その4)

## —個人的カリフォルニア紀行—

GL Garrad Hassan 内田行宣

### 道には全て名前がある

現場の米国人所長は熊のような大男である。フォードのブロンコという一番大きな四輪駆動車に乗り、何処に行くにも愛犬を乗せていた。ウインドファームが竣工すると、彼はサイト内の全ての道に名前を付けた。それらが、どんな名前だったか忘れてしまったが、一番の目抜き通りには、彼の犬の名前が冠されていた。

たまに所長とレストランに行くと、巨漢の彼でも量の多い料理は食べきれず、持帰り用の容器に入れてもらう。彼は、真っ直ぐ車に戻ると、愛犬にそれを与えた。後年、小生はこの仕事で英国に勤務する機会に恵まれ、英国人が持帰り用の袋を頼む際、'Doggie Bag' と言うことを学んだ。これは英国流のジョークの一種で、「これを持って帰っても、私が食べるものではありません、犬に与えるのです」との弁明が込められている。しかし、Doggie Bag と聞くと、私は、いつも所長の犬のことを思い出した。

### 犬が貴方を攻撃します

建設中、道に名前が付けられる前の砂漠の現場の中は、風車とジョシュア・ツリーの他、特段目印になるものもなかったが、仕事柄風車の配置と番号はしっかり頭に入っていたから、風車のタワーに刻印された番号を頼りにすれば、道に迷うことはなかった。ウインドファームの中で道に迷うなんて馬鹿な、と思われるかもしれないが、とにかく広いのである。

ウインドファームの近くの、やはり砂漠の中のジョシュア・ツリーの合間に、風車オペレーション会社のクラブ・ハウスがあった。木造の掘っ立て小屋で、埃だらけであったが、瓶入りの飲料をラップ飲みして喉を潤せば、まあいいか、という気になる。飲料が冷やしてある巨大な冷蔵庫の扉には、誰が何本飲んだか記帳するように記録版が掛かっている。見ると、所長が断トツの一位である。

クラブ・ハウスの中には、テーブル・カーリング(?) とでも呼ぶのか、細長いテーブルの遊戯設備があった。テーブルの上を片方の端から円盤状のものを滑らせ、反対側の端に程近い

ターゲット地点に一番近いところに円盤を止めた人が勝つというものである。

さて、クラブハウスでの楽しいひと時を終え、帰ろうとするも、本当に道に迷ってしまい、帰り道に辿り着けない。そのうちに、民家の敷地の中に迷い込んでしまい、立て看板が目に入る。'Dogs attack you' と書いてある。たいへんだ! 10 匹はいようと見られる犬の群れが、こちらの車めがけて走ってくるではないか! 犬たちは飼主のために、必死でよそ者を追い払おうとしているのだ。米国西部開拓史を垣間見た気がした。

### 西部開拓時代の名残?

私がカリフォルニアで知り合った米国人達は、皆家族を大切にする方ばかりであった。社交的・友好的で、日本から遥々来ている日本人に気を使って仕事の後にわざわざビールを一杯付き合ってくれる。それでも、あまり遅くならないうちに、大切な家族の元に必ず帰る。西部開拓時代以来とも言える家族の絆を感じたものである。「大草原の小さな家」の時代の精神は変わっていない。

米国はあんなに大きな国なのに、自分が生まれたちっぽけな街から一步も外に出たことがない人がモハベには沢山いる、と聞かされて驚いたことを覚えている。富や最先端の技術だけが米国を形成しているものではない。伝統や因習は、新しい国、米国にもあったのだ。

### ビジネス・ディナーはパートナー同伴で

家族との絆が非常に重要な米国では、ビジネス・ディナーは当然ご夫人、或いはご主人同伴となる。それが当たり前だから、議論の余地もない。食事が終わっても話しの盛り上がり収まらないと、我々日本人がホストのときには、いざカラオケ、となる。この時ばかりは、早口の英語の米国人相手に優位に立てる。私は日本で歌っても決して褒められないけれど、我々が付き合っていた米国人達が相手なら、かなり優位に立てた。おっと、これは失礼しました!

(次号につづく)